デイゴホテル物語
―ホテルからみた基地の街コザ―

小平　まゆき

１．はじめに

１.１　問題の所在

現在の沖縄市（本稿では旧コザ市。以降コザとする）の経済基盤を作り上げ、発展を促したのは、皮肉にも「基地の街」という戦後の産物である。今日においても、コザは基地との共存の道を歩んでいるが、今となっては基地に対する依存度は著しく低いものである。

その中で「基地の街」から「商業」を中心に、どのように街を展開させるかが、コザの今後の課題であるというのはいうまでもない。「商業」と一言で言っても様々な種類があるが、その中でも、「ホテル」という商業に注目してみた。

「ホテル」という商業は、地元民ではなく、外からの人、つまり現在では観光客を対象にするものがほとんどだが、戦後「基地の街」として発展してきたコザのホテルはどのような顧客を得て発展してきたのだろうか。基地との関係があったことは安易に想像できるが、果たしてそれはどのようなものであったのだろうか。

一つのホテルに視点を置き、主人からの聞き取りを中心にそれらを探る。また、基地の依存度が極めて低くなった現在、「コザ」という街が現在どのような現状にあるのか、それも同時に見ていく。

１.２　コザ市の前史

前近代期つまり琉球王府時代、この地域は越来間切（行政区）であったが、1666 年王府は東部の美里間切を分離独立させ美里間切とした。その後、明治政府による琉球藩設置（1872 年）、廃藩置県（1879 年）を経て特別町村制の施行（1908 年）にともなって間切が行政村となり、越来村および美里村として戦前期を経て敗戦を迎えた。

そして米軍占領下で両村はそのまま自治体として認められ、前者は 1956 年コザ村に名称を変更となり、同年コザ市に昇格した。その後 27 年間の米軍占領が終焉し、沖縄が日本復帰（1972 年）して２年後にコザ市は美里村と合併して沖縄市となった。

図1　沖縄市の位置

旧美里村はコザ市より面積は大きいものの、農業が主で戦後の都市化は遅れたが、合併後は後者のベットタウンと化し、とりわけ東部海浜地区の干拓事業と都市計画は両地域を大きく変貌させていると言われている（波平 2006）。

図2　沖縄市中心部（通称コザ）

1.3　対象ホテル

今回の調査対象ホテルは、戦後、コザの中心商業地区を形成したといわれている、基地の嘉手納空軍基地第二ゲートに通じる空港通り（通称ゲートストリートまたはゲート通り）に注目し、『DEIGO HOTEL デイゴホテル』（以下デイゴホテル）を対象にした。空港通りまで徒歩約 15 分、中央パークアベニュー通りまで徒歩約５分という場所に立地している。正に戦後、コザの経済発展に貢献したと言っても過言ではないだろう。また、インフォーマントはデイゴホテルの専務である宮城悟氏である。

図3　デイゴホテルの位置

1.4　コザのホテル事情

かつて、コザのホテルはそのほとんどが米軍用ホテルの中途宿泊ホテルであった。ベトナム戦争最盛期で、戦地へ向かう多くの米軍が嘉手納基地を経由するので、その

ような役割を果たすホテルが必要不可欠だったのである。当時コザの人口６万人に対し、ホテルが 30 件から 40 件あまり存在したということから、そのほとんどが米軍用ホテルだったということがうなずける。

しかし、1980 年代に入ると国策により大規模な基地内ホテルの建設が相次ぎ、米軍からの需要が減少したことにより、ホテルも 1990 年代には 13、14 件にまで減少したという。1980 年代には売上げの７割から８割が米軍からの需要だったのに対し、1990 年代に入っては 0.1%まで低下したということから、それが見て取れる。

また近年、沖縄県では沖縄観光ブームに伴い売上げを伸ばしている半面、沖縄市に足を運ぶ観光客はその 20 分の１にしか満たないことから、正常にホテルを営業している数は 12、13 件中、５件ほどだというのが現状だ。米軍からの需要は言うまでもなく、売上げの 0.1%と皆無に近い。

２．デイゴホテル史

２.１　デイゴホテル誕生

1966 年、宮城氏の父親にあたる宮城聖氏（故人）と、妻である宮城タカコ氏（現社長）によって『デイゴホテル』が設立された。そもそも、両氏は元々米軍関係の仕事をしており、60 年代に入ってベトナム戦争が勃発したことにより、嘉手納基地を中継基地として、米軍の行き来が急増した。

このため、米兵がコザの街に足を運ぶことで、少しずつコザの街に潤いをもたらすことになり、米兵がコザの経済発展の先駆者となった。その中の一つがホテル営業である。米兵が急増したことによって、基地内にあった隊舎だけでは間に合わなくなり、米軍司令官の推薦もあってデイゴホテルは「米兵のためのホテル営業」を開始、「デイゴホテル」が誕生した。

また、デイゴホテルは珍しい例ではなく、先述したとおりコザのホテルのほとんどが、デイゴホテルのような米軍用ホテルであった。

２.２　宿舎としてのホテル

デイゴホテルではシングルルーム 18 室のみ、フロントやドライバーが 24 時間態勢で常に待機していたという。時間を問わず米軍が行き来していたことや、それに確実に対応していたということを物語っている。

また、基地のゲートまでホテルから車で迎えに出ていたという点にも注目したい。サービスをそこまで徹底したことも、いかに米軍の売上げが重要だったかということを裏付けている。基地のゲートを出て５分から 10 分のところがホテルの好立地場所だったということから、ゲート前ではホテル同士の顧客、すなわち米兵の争奪戦が繰り広げられたのではないだろうか。そして、シングルルームのみだということも、当時の状況を物語っている。これは顧客が短期間の利用で、頻繁に絶えず米兵が出入りしていたということである。

２.３　沖縄復帰

1973 年、沖縄が復帰することによりホテルにも影響を及ぼした。それまで短期だった米兵の任期が、平均 24 ヶ月から 36 ヶ月になったことで、ホテルもシングルルームだけでは対応しきれなくなった。この理由として、米兵が一人でなく、家族単位で基地を移動するようになったことが挙げられる。

これによってホテルも大型化を強いられた。言うまでもなく、任期中の期間全てを家族でホテルに滞在するわけではない。米兵とその家族は基地内に設置された住宅に滞在するわけだが、配属基地が変更されたとき、変更したその日から住宅に移り住み、生活をすぐに始められるわけではない。それまでそこに住んでいた米兵の明け渡しや準備などに、１週間から 10 日ほどの日数を要する。そこでその期間、家族単位で寝泊りする場所が必要不可欠となる。それが、基地ゲート周辺にある「ホテル」なのだ。

また任期が終了する際にも、次の米兵に引き渡すために同様の日数が必要となる。そこでも米兵はホテルを同じように利用した。このように、米軍の状況に適切に適応していたことから、いかに米軍の需要がホテルにとって大きいものだったかということが安易に想像できる。

また、基地に設置されている住宅というものは、「思いやり予算」と呼ばれる日本政府の国策の一環として提供されたものである。同時に、基地内に大規模なホテルの建設も相次いだことが、米軍の需要がそう長くは続かなかったということを物語っている。

２.４　時代の変化とホテルの機能の転換

1980 年代後半、1987 年の沖縄国体を境に米軍からの需要は低下し、米軍に対する依存は著しく低いものとなり、同時に本土の観光客からの需要に転換せざるを得ない状況となっていた。

顧客が米兵から本土観光客に転換したことは、『あいまいなことはできない』という宮城氏の言葉からもわかるように、コザのホテルの機能を 180 度変化させたと言っても過言ではない。

ここで一つ考察できることは、顧客が米軍だったころはホテルのマニュアルというものはなく、米軍に臨機応変に対応していたことである。また本土観光客に対して、しっかりとしたマニュアルを作成し、マニュアルどおり営業するということも同時に見てとれる。

具体的な機能の転換としては、それまで固形石鹸一つで済んでいたアメニティーグッツを増やしたり、食事を本土向けに改良したり、コザのことを詳細に説明できるように、フロントのインフォメーション機能も整備した。また、デイゴホテルでは現在に至っても、当時米軍向けに提供していた食事を提供している。

しかし、現在においては先述したとおり、沖縄県に訪れる観光客の 20 分の１しかコザを訪れないという過酷な現状にある。そんな中、デイゴホテルでは、顧客を観光客から合宿団体に転換したそうだ。特にデイゴホテルではホテルを起点にして４つほ

どの運動場があり、市街地に近いということもあり冬合宿のメッカとなっている。このように、デイゴホテルは新たな視点から「コザ」を見つめ、目まぐるしく変化する時代の流れに適応し、発展し続けている。

３．コザの街

３.１　戦後の都市化

コザ市は戦後の沖縄都市あるいは戦後の沖縄史を集約したモデル地域といえるという。その理由として、戦後沖縄都市は米軍基地建設と不可分の関係で発展したこと、次に、沖縄本島は日本軍の熾烈な地上戦と日本の敗戦の結果、全くの廃墟から戦後史がスタートしたこと、これと関連して、敗戦後沖縄は日本かえ施政権が分離されアメリカ軍の占領下で戦後社会を再構築してきたこと、以上の点がコザ市には凝縮していることに求められているという。戦後のコザ市の軌道をたどれば沖縄の戦後史がみえてくるといっても過言ではないということが指摘されている（波平 2006)。

波平（2006）によれば、コザ市においての基地設定は土建業を活発化させ、「ドルの二重使用」政策が、敗戦国日本の復興もアメリカの任務という観点から「可能な限り沖縄の米占領軍は予算を日本市場で使う」という方針がとられ、米軍占領によって越来村（コザ市の前身）の約半分の耕地が接収され、農業取得だけでは生活が維持できず、基地関連の生活を余儀なくされたという。

「デイゴホテル」が誕生したように、このように、基地関連の職からスターとした住民や、それを求めて流入した人々が、爆発的な人口集中化を招いたことは容易に想像できる。これらのことから、戦後コザ市において、いかに米軍基地が経済発展に重要な役割を果たしたかということがわかる。

その後 1972 年の本土復帰にともない、基地労働者の大量解雇と都市成長に特有なインナー・エイア問題が加わって、総人口は漸次減少していき、コザ十字路、センター通り（中央パークアベニュー）は衰退が著しいと指摘されている（波平 2006)。

３.２　中央パークアベニューと空港通りの衰退

現在「中央パークアベニュー」と名前は異なるが、基地に依存することしか残された生活手段は無いと悟った当時のコザ市当局が、米軍とかけあい占領地を開放させるとともに、米軍の要請行動の一連として市民大会を開き､「ビジネスセンター」と称する米軍相手の商業地区を 1950 年に開設した。

図4　中央パークアベニュー

その結果、同区にセンター通りが開通し、米人相手の質屋、衣料品店、飲食店、

土産品店などの瓦葺の商店が並び、1696 年には人口が約六千人となりピークを迎えた。

日本復帰後には基地経済からの脱却をキャッチフレーズに、センター通りは観光遊歩道を想定した回廊式のアーケード造りへと作り変えられた。沖縄復帰を契機に、人口は急速に減少していき、現在では、観光客もあまり寄り付かず、店舗も短期間で入れ替わるという不安定な状態である。

現在では、日本復帰後にリフォームされた姿とほぼ同じ形で存在しており、店舗の看板やメニューの英語表記が目をひく。また、嘉手納飛行場とコザ市を結ぶ「空港通り」も「中央パークアベニュー」と類似した道を歩んできた。

図5　飲食店の看板（中央パークアベニュー）

図6　美容店の看板（中央パークアベニュー）

しかしここはパークアベニューと違って、夜になると昼間より少しではなるが活気付く。忘れ去られたように陳腐な看板が目立ち、それに少しばかりネオンが色づけるといった様子であった。嘉手納基地と直結しているせいか、多国籍の人々が朝晩問わず行き交う。

図7　夜の空港通り

３.３　過去の記憶―コザ十字路

コザ十字路。特にコザ十字路の一角にある「銀天街」に足を踏み入れると、そこは埃くさい廃業店が立ち並び、シャッターが閉められ、剥がれ落ちそうな看板がぶら下

がり、そこは「商店街」という名前もふさわしくないようなゴーストタウンと化している。当時ここは 1950 年頃から米軍基地関連の雇用員や商業者が集まり、市場や劇場などの娯楽施設が建てられ、コザ市を代表する中心街へと成長した。

波平（2006）によれば、1972 年４月 17 日の『沖縄タイムス』で、「沖縄本島のやや中央に位置する同市（注、コザ）は、南北交通の重要拠点となって、戦後急速に発展、縦横に走る軍道綱（ママ）の発達と共に人口が密集し、新興都市として、日進月歩の目ざましい隆昌を極め、那覇に次ぐ国際色豊かな街は、横文字の看板で埋めつくし、沖縄のアメリカを思わせるニュースタイルを生んだ。白、黒、黄色の人種が行き交う。軒なみのバーやカフェ街、軍作業の混雑、タクシーやハイヤーの氾濫、米人に寄りそった女たち、原色折りまぜた雑多な街頭風景は、その昔の“モモ売りアン小ー”の情緒をすっかり消しているが、ビジネスセンターとして力強く立ち上がった新興都市コザの街、現代の脚光を浴びながら、今勇ましく前進続けている。」と 1956 年頃のコザ十字路周辺の風景を紹介していたという。

図 8　銀天街出入り口

図 9　銀天街の中

現在では、不気味ささえも感じるこの街が、かつてそのように光輝く街だったと誰が信じることができようか。また、「銀天街」のすぐ横に住宅街があったが、今にも崩れそうな住宅街ばかりが目立ち、よりいっそう不気味さを与え、不快感すら覚える。

商店街のすぐ横に普通の住宅が立ち並ぶとは少し考えにくい。果たしてどのような目的で、どのようにして使用されていた建物なのか、今となっては疑問だけが残る。

図 10　銀天街の看板

図 11　銀天街の中の路地

図 12　銀天街のすぐ横にある廃墟

４．結論

「チャンプー文化の街」や「横文字のあふれる街」、「多国籍の文化が集まる街」などコザに対する印象はこのように定着し、観光客側としてはそのイメージや期待を持ってコザを訪ねる。逆にコザ自体もこれを売りにして街をアピールしている。しかし実際はというと、横文字はかなり少なくなっているし、多国籍どころか人の姿すら見受けられない箇所が何度も見られた。

またコザ十字路地区周辺では、日本復帰後による米軍基地の経済効果の低下に、インナー・エリア問題が加わり、衰退、そこに高齢化と貧困化が加わり最悪な状況になった。ここは 1960 年代、1970 年代に人口ピークを迎えている。不思議なことにその地域と生活被保護率が大部分重なるということが指摘されている（波平 2006）。

数年前までは「基地の街」として栄えてきたコザだったが現在はそれだけでは通用しないということが見てとれた。また、なかなか「コザの街」という後遺症から克服できないことも、戦後のコザにとって米軍基地が、街に潤いをもたらし、人々の生きる手段として重宝されてきたところにあるのだ。

その発展があったおかげで今の沖縄があるのだから、「基地」とは切っても切れない縁だということが理解できる。今後コザがどこに視点を置き、どのようにして街をアピールし発展させていくことが課題であろう。

参考文献

波平勇夫（2006）「戦後沖縄都市の形成と展開―コザ市にみる植民地都市の軌道―」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』9-2